

Empirical Analysis of Prosocial Behaviors, Social Capital and Subjective Well-being

范, 潇

<https://hdl.handle.net/2324/5068162>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (経済学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (3)

氏 名	范 潇 (Xiao Fan)		
論 文 名	Empirical Analysis of Prosocial Behaviors, Social Capital and Subjective Well-being (向社会的行動とソーシャル・キャピタルが主観的厚生に与える影響)		
論文調査委員	主 査	九州大学	教授 浦川 邦夫
	副 査	九州大学	教授 宮崎 毅
	副 査	九州大学	准教授 堀 宣昭

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、人々の主観的厚生に影響を与える要因として、ソーシャル・キャピタルならびに人々の向社会的行動（ボランティア活動、寄付活動など）の役割に注目し、日本と中国の個票データを用いた実証研究を行っている。本論文は5つの章から構成される。

第1章は、ソーシャル・キャピタルと向社会的行動に関する概念整理を行った後、主観的厚生に影響を与える諸要因を検証した先行研究をサーベイしている。第2章では、対人関係のソーシャル・キャピタルを測る尺度である **Resource Generator** をもとに、個人のソーシャル・キャピタルと寄付行動の関係を分析している。計量分析の結果からは、男女ともに、ソーシャル・キャピタルと寄付行動との間に一定の正の関係が見られた。

第3章では、中国の家計パネル調査（CFPS）の個票データを使用して、金銭的支援や寄付行動を行うことが、支援を行った本人自身の主観的な幸福感に与える影響について検証している。分析結果によると、支援内容や寄付の対象により、その効果は大きく異なる。自身の子どもへの金銭的支援は、主観的幸福に有意に正の相関を持つが、両親、友人、同僚への支援については、幸福感と負の相関を持つ。一方で第三者への寄付行動については主観的厚生との間に一定の正の相関が確認される。第4章では、日本のインターネット調査の個票データを使用して、地域のソーシャル・キャピタルや本人の向社会的行動が、主観的な貧困感とどのように関連するかを調べている。推定結果によると、地域社会とのつながりや信頼の程度を示す諸変数は、本人の主観的な貧困線を引き下げ、結果として主観的貧困のリスクを減らす方向に作用している。第5章では、これまでの分析結果を要約したうえで、向社会的行動に関する政策支援や課題を論じている。

本論文は、地域のソーシャル・キャピタルの水準と人々の向社会的行動・主観的厚生の関係など、近年重要視されている分析課題に注目し、個票データをもとに実証分析を行ったものであり、日本と中国の地域政策・福祉政策への一定のインプリケーションを提示したという点で評価される。

以上の点から、本論文調査会は Fan 氏から提出された論文「Empirical Analysis of Prosocial Behaviors, Social Capital and Subjective Well-being」を博士（経済学）の学位を授与するに値するものと認める。